

## 『山本泰次郎聖書講義双書』について

『山本泰次郎聖書講義双書』の著者山本泰次郎先生は、内村鑑三にその晩年の十年間親しく師事され、内村没後、一九三四年九月に月刊誌『聖書講義』を創刊、以来四十年余これに拠って福音宣伝に従事してこられた独立伝道者である。一般には、教文館版『内村鑑三全集』の編者として知られている。

この度刊行中の双書は、この『聖書講義』誌上に、四十年にわたって掲載された聖書の講義・注解を集めて、聖書の各書別に編集し、旧約三巻、新約七巻としたものである。

旧約三巻の中には、『聖書講義』誌の創刊と前後して出版された、著者の処女作である『ダビデ伝』が、また新約七巻の中には、絶版でその再刊が待たれていた『使徒行伝の研究』や、『ローマ書講義』などすでに単行本として上梓されたものも含まれている。

『聖書講義』誌には、その中心をなす聖書講義のほかに、毎月巻頭に信仰所感とも言うべき短文数篇と、折々に講演・講話などの形をとった論説が載るが、それらを集めて選択編集したものを別巻として付

した。「信仰所感集上・下」、「信仰論説集上・下」、それに特に内村鑑三に関する諸篇を集めた「内村鑑三論集」の五巻である。

なお旧稿の多くは、この双書に収めるにあたって、著者じしんによる改訂、あるいは書きかえがおこなわれた。

この双書が刊行されるに至ったきっかけは、もう三年以上も前のことになるが、友人のキリスト教図書出版社・社主のオカノ・ユキオ氏から「山本先生の聖書注解を出したいと思うが、編集をしてみてくださいませんか」と声をかけられたことであつた。私はかねがね先生の著作を何らかの形でまとめておきたいと思っていたので、願つてもないことと、非力をも顧みずに早速ひきうけてしまった。それから先生のご承諾を得て編集の実務にとりかかったが、折あしく石油ショックによる印刷費や用紙の高騰その他悪条件が重なつたにもかかわらず、幸いにこの企画が実現し、刊行が開始されたのは昨一九七五年六月のことである。以後隔月に一冊のわりで、これまでに五回の配本が終り、来一九七七年の秋には全十四巻の完結をみる予定である。

出版事情のきびしい時であつて、こうして刊行が順調に進められているのは、ひとえに出版者であるオカノ氏の好意と熱意によるもので、編集者として感謝にたえない。因みに「キリスト教図書出版社」は、聖書注解書の出版を中心に事業を進めていこうという、小さいながら意欲的なキリスト教図書出版社である。

著者の聖書講義は、最新の聖書学の成果をとりいれたというようないわゆる学者の注解書ではない。といつて、それはまたいわゆる敬虔

型の説教的聖書霊解とも異なる。例えば使徒行伝講義に顕著に見られるように、著者の講義は実に堅固で厳密な学問的研究に支えられている。また例えば詩編や福音書の講義にきわ立って見られるように、著者の講義は驚くほど霊的なのだが、しかもそれは人生のきびしい体験と豊かな常識とにうら打ちされている。著者自らの言葉をもって言えば、それは

「ひとりの日本人が直ちに神を信じ、キリストを仰ぎつつ、ただ十字架の贖罪の福音に救われた喜びに踊りながら一生涯を送った信仰の告白の記録」

なのである。ここに著者の聖書講義の力の秘密がある。著者はこの双書の刊行にあたって、また次のように言っている。「日本伝道の方法いかんは、実に重大な問題です。著者はあらゆる観点からして、文書伝道、特に聖書を注解して提供することこそ、日本伝道として最善である。いな唯一の道であると信じて、今日までそのために、すべてを忘れ、すべてをささげて来ました」。

この熾烈な伝道心と、読者に対する深い愛とが、この八千ページにも及ぶぼう大な聖書注解を生んだのであろう。著者の講義が実に懇切丁寧で、内容・文章ともにきわめて明晰であるゆえんも、またここにあるのである。

自らを「聖書キリスト教を信じる聖書信者」と規定する著者の聖書

講義が、徹底的に聖書的であることは言うまでもない。著者の聖書解  
釈は、しばしば人の意表をつき、一見いかにも独特に見える。しかし  
実は、むしろ非常に客観的で、聖書そのものをして聖書そのままに語  
らしめようとする。それが時には人の心を鋭く刺してやまない、厳し  
い言葉となる。しかしそれ故にこそ、著者の聖書講義はまた、著者と  
「同じ悩みにある人」すなわち、罪の苦しみに泣き、イエス・キリス  
トの十字架による救いを慕い求め、天国をあこがれ望む者にとつては  
実に深い福音的慰めと、力強い信仰的励ましとに満ちているのである。  
この双書の編集者として私は、著者の聖書講義が、この時代の日本  
のキリスト教の確かな証言の一つとして、長い将来にわたって、日本  
の福音化のために用いられるであろうことを確信している。また長年  
『聖書講義』のみによって信仰を養われてきた私個人としては、この  
双書の編集をもって、山本先生に対する私のささやかな感謝の表明と  
しうることを、まことにありがたいことと思っている。

(所載) 「本のひろば」一九七六年五月号